

中国才子佳人小説の影響 馬琴の場合

磯部 祐子*

要 約

日本における中国才子佳人小説の影響を、馬琴に焦点を当て考察する。馬琴の才子佳人小説受容は、新たな創作のための「新趣向」を求める動きの中で行われた。しかし、「新趣向」の実践においては、常に一つの「用心」を働かせなければならなかった。ここでいう「用心」とは、書肆の確立にともなう営利の意識であった。それ故、幾つもの才子佳人小説を目にし、創作のヒントを得た馬琴も、営利追求の前には、出版断念を余儀なくされる状況が生じたことを指摘する。

馬琴の翻案小説『風俗金魚伝』の出版と成功の理由は、原作そのものが、日本の小説には例を見ないスケールによる主人公の苦難との遭遇とその克服という「新趣向」、人物の内面描写の相対的深化などの描写面での完成度の高さを備えていたからである。「用心」に十分応えうるものであればこそ、翻案に至ったのである。

このような中国小説の翻案にいたる背景は、馬琴においてのみ顕著であったのではなからう。江戸期の日本は、中国文化の受容と展開において、時代の尺度に応じた取捨選択がなされてきたと概括できる。この点、同じく才子佳人小説を受容した朝鮮半島・越南の地域と大いに異なる。

キーワード 馬琴 才子佳人小説 翻案 東アジア 比較文学 受容
新趣向 用心

1. 始めに

明末・清初は、中国の出版にとって一つのエポックであった。現存の書籍残存数からすれば、民間書肆の発展は正にこの時期であったといえよう。ほぼ時を同じくして、江戸時代の日本も出版業が確立する。両国では、営利を目的として多くの小説を出版することになる。

書肆の発展下、中国では、才子佳人小説があたかもシリーズもののように次から次へと出版される。やがて、それらは越南、朝鮮半島ばかりか、海を隔てた江戸期の日本にも将来され、翻訳・翻案の形で受容されていった。

小論は、「中国における才子佳人小説の出版と朝鮮・越南・日本への影響（平成13・14年度特定領域研究「東アジア出版文化の研究」）のテーマのうち、日本における才子佳人小説の受容を、馬琴を通して見ようとするものである。

なお、才子佳人小説は、最近の中国では、煙粉小説、人情小説、言情小説、純情小説など、いろいろな呼び方があるものの、「白話化した伝奇小説であり、才子佳人小説は艶情小説とに絶対的な境界線はない（注1）」「もっともがちり固まったパターンは科挙に合格した主人公が二人の美女を妻にするというもの（注2）」の定義は的確であろう。一般には、才子佳人小説の共通項として、才子と佳人の物語、運命的な男女が試練に遭遇し、それを克服して結ばれる、極端な性描写に走らない、という三点を指摘できよう。

* 地域ビジネス学科

2. 馬琴に見る才子佳人小説の受容

2.1 『金雲翹伝』の翻案

馬琴は、多くの中国小説を翻訳・翻案した。『絵本武王軍談5巻』（寛政12年=1800）、『絵本漢楚軍談10巻』（享和元年=1801）、『絵本西遊記』（文化3年=1806）の序と校閲、『金毘羅船利生續初編6巻』（文政7年=1824）（西遊記に倣う）、『傾城水滸伝』（文政8年=1825）、『風俗金魚伝』（文政12年=1829）、『漢楚賚擬選軍談初編』（文政12年=1829）、『開巻驚奇侠客伝』（天保3年=1832）（好速伝の翻案）、『新編金瓶梅』（天保2年=1831）などである。

以上の作品のうち、『金毘羅船利生續初編6巻』、『傾城水滸伝』、『風俗金魚伝』、『新編金瓶梅』が、いわゆる長編合巻（絵画入り絵本であるが、絵は挿し絵程度の意味しかもたず、文章が優先するものであった）である。中でも、『風俗金魚伝』（注3）は、馬琴における才子佳人小説翻案の代表作品といえる。この小説は、中国の小説『金雲翹伝』を翻案したもので、『商舶載来書目』の宝暦4（1754）年にその書名が見えている。金雲翹伝が江戸に将来されたのち『風俗金魚伝』誕生以前に、翻訳小説『通俗金翹伝』が生まれた。『通俗金翹伝』は、清・青心才人編述。西田維則訳。宝暦13（1763）年、撰江藤屋弥兵衛・同吉文字屋市兵衛・東武同次郎兵衛の刊で、外題に「通俗金翹伝」、目録題に「繡像通俗金翹伝」と見え、5巻6冊よりなる（注4）。

訳者西田維則是、近江・朽木村の人で字を子孝といい、幸庵、口木子、口木山人、贅世子とも称した。岡白駒の門下で、風月荘左右衛門（沢田一斎）の友人でもあり、『通俗金翹伝』（1763=宝暦13年）の他、『通俗西遊記初編』（1758=宝暦8年）、『通俗隋唐煬帝外史』（1760=宝暦10年）、『通俗赤縄奇縁』（1761=宝暦11年）などを訳している。

これらの翻訳作品は、当時の日本人から見れば、いずれもエキゾチックな趣を覚えたに違いない。『西遊記』のダイナミズムとユーモラス、『隋唐煬帝外史』の風流と怪奇は、日本の文学土壤では生まれ得なかったものであった。一方、『赤縄奇縁』は、「売油郎独占花魁」のことで、この話は、当時すでに『通俗繡像新裁綺史』や『通俗古今奇観』など幾つかの翻訳があり、かなりの人気を博していた。貧しい油売りと臨安きつての花魁との風流佳話は、維則もそのあっぱれぶりを好んだに違いない。『金雲翹伝』もまた、佳人・王翠翹なる人物が金重なる男性と将来を誓ったのも束の間、偶然の出来事から父を救うため娼家に売られ、女將に偽られ、男に騙され、妾になるや本妻の激しい嫉妬に置かれ、逃れて結婚した相手もまた不幸になるなど、度重なる苦難を克服しながら尼となって生き抜き、終には妹の王翠雲ともども、及第し出世した金重と結婚・団円する話で、不幸のダイナミズムと広大な舞台という点では、日本にはないスケールをもつ。また、次々に降りかかる不幸を精一杯生き抜こうとする王翠翹の内面描写という点でも、才子佳人小説の千篇一律な人物描写にあってとりわけ抜きんできた作品といえる。

原作の題名「金雲翹伝」の金はヒーロー金重を指し、雲・翹は金重に嫁ぐことになる二人の姉妹王翠翹・王翠雲を示している。翻訳作品題が「金翹伝」と変更され、「王翠雲」を意味する「雲」の文字を作品より排除したのは、王翠雲の比重が小さいからである。

『通俗金翹伝』は、基本的には原作に忠実に翻案されたものである。その基づいた版本は、今日内閣文庫本に代表される版本の類であろうと推測される。というのも、神宮文庫や大連図書館に存在する版本の類と詩詞が異なるものがあるからである。ただ、神宮文庫や大連図書館にはあるが、他の版本では欠葉となっている部分（内閣文庫本の系統本では二葉目）が、『通俗金翹伝』では省略されずに訳出されていることから、欠葉に関しては神宮文庫本や大連図書館本と同じ系統のものをも参考にしていただと思われる。一方『通俗金翹伝』には、中国趣をもつ20葉の挿し絵

が添えられる。これは、中国の版本には見られず、この通俗本の独創とみてよい。

『通俗金翹伝』の作品の筋は、原作とほとんど変わらないが、「夫婦の縁は前世の定め(『金雲翹伝』に見える「姻縁前定」という4字が、『通俗金翹伝』では省略されている)という考えは、あまり強調されていない。次いで、老娼が翠翹に恋の七芸八法を説くところは省略せず、世俗的ながらも種のおもしろさを読者に提示している点を指摘したい。とりわけこの恋の七芸八法について言えば、次に取り上げる滝沢馬琴の作品が、話の筋を重視し、話の展開上さほどの意味をもたない恋の手練の説明については最低限の描写に止めているのとは大いに異なる。

馬琴の『風俗金魚伝』は、上述の西田維則訳本が宝暦13年(1763)に出ておよそ70年後、文政12年(1829)に曲亭馬琴によって翻案されたものである。成立の背景について、その序で、『通俗金翹伝』が原文にとらわれてどこかしっくり行かないので、新たに書いてほしいという書肆に同意してのことであり、前作には淫風が多すぎるのでそれを改め、「劉談仙の示幻」と「三合道姑の神通」をうまく結びつけ、因果応報の筋の通った作品を作りたいという動機があつたのこと、と馬琴は述べている。それは、文政以後、合巻という形式の中で女性の流転を記し、その中に因果応報観を描き出そうとした馬琴の創作態度とも一致している。

馬琴の創作態度を明確にするために、『風俗金魚伝』の梗概を簡述すれば以下の如くである。

主人公は、足利時代(1333~1467)の末、摂津国難波村の金魚商を営む船尾鱗蔵の娘魚子。高津の遊君・地獄の墓に詣でて庭井金重郎と見初め合う。その夜、夢に、地獄が表われ、色欲界に沈む我が身の因縁を教えられる。

魚子・金重郎二人が深い仲になって間もなく、金重郎は本宅からの知らせで鎌倉に向かう。その折しも折り、魚子の両親は濡れ衣を被り、その両親を救うため、魚子は大尽廻四郎の妾となり、騙されて遊女となる。やがて赤穂の御用商人錫梨束太郎に身請けされる。が、束太郎の本妻鵜橋に知られる所となり、鵜橋とその母計井とによって赤尾に連れていかれて下女にされ、鵜橋の執拗なまでの虐待を受ける。しばらくして難を逃れた魚子は、覚縁尼のもとで尼となる。それも束の間、覚縁が託した加世岐婆に欺かれてまた遊女にさせられる。

しかし、大磯にて判官の子・下野太郎氏武の妻となり、武蔵相模を討って、鎌倉をも手に入れた夫と共に、幸福な日々を送る。氏武は魚子のために、魚子を苦しめた撫牛廻四郎、此四郎、鵜橋、計井、加勢木婆などを生け捕り、懲罰を加える。その後、魚子は氏武に、管領扇谷朝興と和睦・降参し朝廷の恩免を蒙るように諫めたが聞き入れず、扇谷の間者を受け入れたが為に、扇谷の夜襲を受けて戦死する。そこで大功を立てたのは布留弁弥であつた。扇谷は魚子を布留に妻として与えることとした。しかし、魚子は布留のふるさに向かう戦中で、布留を夫の敵として殺し、自分も入水した。が、覚縁尼の命を受けた漁師弥陀介が網にてその亡骸を捕らえ、覚縁尼の力にて魚子を蘇生させる。魚子は、仏の道を修め、妙竜という法名を授けられる。

一方、金重郎は魚子の妹の乙魚と婚を結ぶ。その後、金重郎と魚子の弟鱈次郎は、足利輝若襲撃の場に出会い、それを助けた功により、高禄で足利將軍に召し抱えられる。將軍家の命で銚子の潮来明神に参った二人は、思いがけなくも魚子に再会し、難波に連れて帰る。その後、鱈次郎が魚子に同居を求めたが、出家の身の上ということにて草庵に住み、大禅尼と仰がれる。金重郎、鱈次郎の家も行く末までも栄える。魚子は、前世天竺の無熱池の金魚であつたが、多くの小魚を食った悪行によって、このような今世の艱難を招いたという。

以上の梗概は、「この書も傾城水滸の如く、胎を奪ひ骨を変え、本邦の事に綴易て、新しうし給ひね、小人得て饜まく欲す(『風俗金魚伝』上編序)という方針のもと、時代を日本の足利時代

の末・戦国の世の中に設定し、金魚を商う浪人が3匹の金魚を手放したことを自分の子供の運命の前兆とし、長女魚子が高津の遊君地獄の塚に詣でる場面から艱難の人生を開始させる。原作の金重に相当する人物は庭井金重郎と名付けられ、徐明山は下野太郎氏武とする。ストーリーは、観音の化身である覚縁禅尼から、魚子の前世は天竺にある池の金魚で、同類の金魚を食った罪で現世の波乱を招いたと知らされ、やがて罪障を償い成仏する、という結末で終了する。

因果応報の点においては原作との類似をみるものの、性に関する描写においては極力削除することを旨としている。例えば、原作には、前述のように、遊女としての手練手管が数え歌のように記され、作品に、一種の精彩さを与えている。これに対して、『風俗金魚伝』では閨房の細やかな描写は一切切り捨てられている如くである。

また、次のような些細な部分でさえ、馬琴は徹底してエロチシズムを抑えようとしている。それは、遊女から抜けだそうと駆け落ちしようとする場面である。『金雲翹伝』では、翠翹が駆け落ち相手の楚卿を初めてみたとき、楚卿の「飄巾華服」に心惹かれ、「旧家の子弟のようであり、淫らな思いは起きなかったものの、些かぼんやりとして良い案が浮かばなかった」ほどであった。しかし魚子が駆け落ちしようとする相手といえば、容貌に魅力もなく、当然原作に記された恋の詩の応酬もない。魚子はいう、「(その男は)打見たときは色浅黒くて。よき男にはあらずかし」と。そんな外貌の男ではあるが、駆け落ちしてもらうためならば、と意を固めるのである。

このような改変は、文政12年(1829)出版に当たり、馬琴が記した「彼の金翠翹傳は淫風を宣て時候に媚び、佳人を傷損して、欲を導く者に似たり。ここをもて、余が意に適さること多かり」(『風俗金魚伝』上編序)言猥褻に過ぎたるは綴り易へたるも多かめる...(『風俗金魚伝』下編序)という文学観によってなされたものである。

1837年刊の初編の序(東京大学・東洋文化研究所・倉石文庫所蔵本)になると、馬琴は「(天朝宝暦の訳本は)童蒙児女は猶いまだ解すること難き文体多かり。...ここにおいて書買がいへらく、此書も傾城水滸のごとく胎を奪、骨を換、本邦のことに編り易れば、貌に誇り才を負み、遂にその為を愆といふ。世の才女等の警ともなりなば、微善の一端ならんと。」と述べる。勧善懲悪を強く意図していたことが窺える。また1839年に五編目を記した折りに、やはり「唐山なる、金翹傳の翻案なれども間亦作者の新意を交へてもて勧懲を正しくしたる」と、原作に大幅な変更を加えても勧善懲悪を貫きたいとの意志を再述している。

江戸時代において、小説にはおもしろさと有用性の両者が同時に備わらなければならないことが、作者と読者の共通の見解であった。馬琴の場合は、勧善懲悪こそが最大のユテリテイであった。それゆえにこそ、『風俗金魚伝』には、『金雲翹伝』とよく似た流転が記され、苦界に身を墮した魚子は翠翹さながら次々に訪れる艱苦に翻弄されるが、魚子は翠翹よりも徹底した態度でこれらの艱難を克服するよう描写される。そうしてこそ、前世の因縁は克服でき、善行が高く評価されることになるのである。

2.2 その他の才子佳人小説の翻案

『金雲翹傳』の他、馬琴は、どのような才子佳人小説を受容していったか。その手掛りを、出版物の巻末に付された出版予告に見ることができる。江戸も中期になると、読本の板元が刊行した書物の巻末に、近刊予告をすることが多くなされるようになった(注5)。馬琴作『頼豪阿闍梨怪鼠傳(仙鶴堂)』の巻末にもそれは見られるが、「近刻披露総11部」として記された滝沢馬琴近刊予告書のうち、『松浦佐用媛石魂録』『名歌徳四才子傳』『女郎花頼風傳本朝金石縁』は、中国の才子佳人小説と大いに関わりのある書名である。このうち、実際に刊行されたのは、『松浦佐用

媛石魂録』一つである。この作品は、いわゆる第四才子書『平山冷燕』をその典拠として、日本の伝説や出来事を織り込んで作品化したものである、といわれる。しかし、実際は、前半上巻第2回「陰陽贈答して名初めて香し」から前半中巻第5回「才を猫で讒奸罪せらる」までのプロットに限られている。一方で、出版には到らなかったものとして、『名歌徳四才子傳』が挙げられる。「四才子傳」という名称から『平山冷燕』全編を翻案しようとしたのではないかと推測される。

この中国才子佳人小説の代表作とも言える作品の翻案が完遂されなかったことについて、馬琴は書簡で「四才子傳八能文二て詩句聯句杯実二妙也。乍去趣向八淡薄二て今の流行二あひ不申候。文人の歎ひ候小説二て御座候(文政12年2月12日付殿村篠斎宛書簡(注6))と記す。四才子伝は『平山冷燕』である。文章の巧みや中に散りばめられた詩句の美しさは評価するものの、ストーリーにさほどの新奇性はないとする。美文を好む漢学に秀でた文人の趣向に合っても、いわゆる広範な江戸時代の小説の読者には、好まれなかったのである。この傾向は、当時の文人たちが、中国の戯曲を取り入れたときにも同様であって、美文をめぐる文人層は限られた人々であった(注7)。それ故、『松浦佐用媛石魂録』のなかには、原作の詩を和歌や連句に直し、原本の影響のもとに日本風に改めて作品に散りばめられていったところがあるものの、作品そのものの淡薄な「趣向」は作品の全翻案を可能にさせることはなかった(注8)。『女郎花頼風傳本朝金石縁』も、才子佳人小説『金石縁全傳』を典拠とした作品で、その出版が計画されていたが、刊行されることはなかった。

3 馬琴翻案の特徴

3.1 翻案への姿勢 新趣向を求めて

さて、上述の「趣向」の追求こそが、馬琴が才子佳人小説を翻案する根底に存在したと見ることができまいか。馬琴が『風俗金魚傳』序で、再三にわたり、勸善懲悪の有用性を主張することとは裏腹に、現存する馬琴書簡の中には、「趣向」への言及が散見する。

「1 風俗金魚伝 右同断

これ八金翹伝ヲ日本の事二つくりかへ申候。初編八冊、当冬出版。

右両様とも、此節板下過半出来、追々ほり立申候。けいせい水滸伝流行二付、合巻ものゝ趣向一変いたし、諸板元かやうのものを歎び申候。新趣向より作者八楽二て、よろこび申候。士君子ハうれしがらぬものニ可有之候。但し、漢楚ハむりこじつけにせず、和漢有来りのすぢをよく綴り合せ候処が、作者のはたらきニ可有之歎。出板之節、御高評可被成下候。金魚伝ハやはり金翹伝二て、彼すぢのわるき処ヲ少々ツ、補ひ候のミニ御座候。かやうのもの永くはやらせたく、祈り申候。大ニらく二て、趣向ヲ案じ候苦ヲのがれ候。御一笑。(文政11年5月21日)

この書簡には、『金雲翹傳』は板元が喜ぶ「趣向」であり、新趣向が原作の中に存在するので、新たに作るより翻案の方が楽であると截然と記されている。そしてついには「大ニらく二て、趣向ヲ案じ候苦ヲのがれ候。」と、板本の催促に追われる売れっ子作家の本音が自嘲めいた筆致で表出されているのである。

ところで、この「趣向」とは、本来、歌舞伎の作劇上に用いられたことばであることは夙に知られる(注9)。一般に、本筋ではなく、話の起伏を作りうる「横筋」を意味すると解釈されているが、馬琴においては、より広くあるときは本筋をも含有しているように見られる。

新しい趣向の小説を創る必要性のもとに、中国の書籍にヒントを求めた馬琴は、多くは借用という形で唐本の入手に努めた。それでは、いかなる書籍を直接目にすることができたであろうか。以下に見える書簡には、殿村篠斎から借りた数冊を、春の強風による火災を避けるため返却する旨記されている。

「一たび松坂江御立帰り、御令政御同道の御つもりのよし、其比恩借之唐本・松蔭日記等返上いたし候様、旧冬被仰越、承知仕候得ども、当春此節迄、日々大風にて、火災も度々有之候故、甚心配二御座候。既二拙宅近辺神明田明神表門向もよほど焼亡し、一夜大さ八ぎいたし候。依之、御蔵本とめ置候も甚心配二付、少しはやく八存候へども、

隔簾花影 一帙

両交婚伝 一帙

松蔭日記 六冊

右紙包二いたし、此度松坂御宅迄返上仕候。永々留置、忝仕合二奉存候。野生、早春来とかく不快にて、気分引立不申候。且、当年八著述出精せねバならぬわけも御座候間、読書の暇無之候。(天保6年2月21日)

「両交婚伝一帙」とあるのは、清初才子佳人小説の一つで、『新編四才子二集両交婚小伝』は別名「続四才子」とも呼ばれ、甘頤・甘夢兄妹と辛古釵・辛發姉弟の話である。この「両交婚伝」を読了していたことが次の記載から窺えよう。同書の名は、馬琴の知己で馬琴の作に常に批評を施していた高松の家宰木村黙翁の「国字小説通(注10)」にも「平山冷燕の後編には両交婚伝あり、是等は皆前編とは別人の作にて」との記載が見え、当時の好事家たちも目にしていたことが窺える。馬琴は、以下に引くように、この書を「奇妙之珍書」「是迄恩借の小説中、かばりめでたき妙作八未覚候。」と評価する。しかし、直接翻案することはしない。その理由は、「平山冷燕に似かよひ候処なきにあらざ候へ共、筋よく通り、且巧二御座候。」と、内容面で「平山冷燕」との類似が指摘されるように、作品がいわゆる一般読者の嗜好に合わないことを読みとったからに他なるまい。

書簡原文は、以下の如くである。

「一 旧冬夜分八、不眠且寒気に堪かね候故、薄暮毎夜倚炉、安閑と亥中迄罷在候故、かねて借用の両婚交伝并二隔簾花影を毎夜披見。かねても申上候ごとく、花影は先達而四、五冊よみかけ候処、其後久しく成候而、忘れ候処も有之二付、先づ両婚交伝を看かゝり候処、此小説奇妙之珍書にて、且筆工八チ八チといたし、燈下二ても至極よみ易く、ことの外おもしろく覚候故、旧冬、全部看訖り候。是迄恩借の小説中、かばりめでたき妙作八未覚候。尤前編、平山冷燕に似かよひ候処なきにあらざ候へ共、筋よく通り、且巧二御座候。但シ、詩八前編二劣り候様二覚候。譬バ平山平燕八造化天然の名花のごとく、両婚交伝八それをにせて上手の作りし綵剪花に似たり。勿論、二才子・二才女も、平山冷燕の二才子・二才女に劣り候故也。」(天保六年一月十一日)

一方、借用ばかりか、購入までしてそれを読もうとしたことも、次の才子佳人小説『二度梅』に関する記載から窺える。もっとも、いくつかは、その後の家庭の困窮と相まって売却を依頼する書簡から、そのことは判明するのである。

「小説物八、

二度梅 帙入小刻六冊

俣三朱二てかひ入置候。忝朱ならバ沽却いたし度候。

水滸口伝全伝 二十四冊四帙

是八金貳兩壹分二て、素人の長崎を齎し候を、かひ入候。貳兩くらみならバ、うりたく存候。但シ、上方八江戸を唐本廉に候よし二候へバ、やすかり候半欸。これら皆いそがらざる義二候へ共、序二申上候。(天保十一年二月九日)

当時の書籍代は同時期の馬琴の収入と比べても決して安い物ではなかった。たとえば馬琴が当時だいたい「読本一冊二両、合巻一冊十枚で一両位の相場」「馬琴の一年の原稿料が三十五兩乃至四十兩であった」ことと比較してみれば明瞭である(注11)。

この『二度梅』に関しては、天保8年の篠斎への書簡に既にその書名が見えていて、上の内容は篠斎がこの書の購入に当たって価値の有り無しを馬琴に訊いたその返答として書かれたものであることが窺える。

しかし、中国書籍購入の様子を最も多く記すのは、次の資料であろう。

「一醒世恒言、連城壁、冷山平燕、御入用に付、此地書肆をも心がけ有之候はゞ、先直段等早々申上候様御頼之趣承知仕候。当地書肆英平吉没後は芝神明前岡田やより唐本買入候。然ル處遠方に付平生疎遠に御座候。其上岡田やは評判の高直やに御座候に付無據義に無之候ては注文不申遣候。尤それにも不限候間心がけ有次第可申上候。近来小説もの直段二三十年已然とは半分餘も高直に成候。寛政の末より文化中は追々俗語小説ものかひ入五六部にも及び候處、其節は石點頭代金壹方、笠翁十種曲代拾貳匁.....(一部省略)...平山冷燕金壹方、醉菩提金貳朱、金翹傳代九匁、西廂記點付候本代金壹方すべて此位の直段にて購得候處、只今は其節代金壹分なりしもの貳分にても手に入かね候。...(一部省略)...文化の末より見識かはり小説ものはうつとうしく覚候間、追々有用の他本と交易いたし、只今は三ヶひとつも無之只端本など少し残し置候のみ、をしき事をいたし候也。其節は小説をよみ立候、而趣向に用ひ候より新に趣向を案じ出し候がはやく候故、只なぐさみに見候のみに御坐候間、貪着不致候處、近来は又元の麓へ立もどり俗語小説も有益不少事御坐候間、又ほしく成り少々ツゝかひ入候半と存候へば高直に付、手のとゞかぬもの多く御坐候。なまじいに前々の直段を存居候故まんざら高直のものかひ入がたく殊に書は衣食住の外故、囊中不續々々齒を切り候事多く御坐候。...(天保三年四月廿八日)「曲亭書簡集」『日本芸林叢書第九巻』六合館 昭和4年)」

この書簡は、馬琴が唐本小説を集中的に購入した時期があったことを伝える。馬琴は、ピーク時5、60冊の小説を手に入れていたが、「其節は小説をよみ立候、而趣向に用ひ候より新に趣向を案じ出し候がはやく候故、只なぐさみに見候のみに御坐候間、貪着不致候處」とある如く、あくまでも「趣向」を案じ出す材料としての蔵書であった。そのためか、見終えた書籍は、「他本と交易」することになる。

このように、馬琴は、才子佳人小説を目にしたものの、多くは「新趣向」を求めた読み方を行った。その背景として、書肆が確立し、作家として生計を立てることが可能になったことが指摘できる。

3.2 翻案に当って 「用心」

新趣向の背景に、働く「売れるか売れないか」の強い関心は、馬琴の場合「用心」ということばで表現される。

「板本の作者ハ、書をつゝるのミにあらず、かく申せハ自負に似てはつかしく候へ共、作者の用心ハ、第一に売れることを考、又板元の元入何程かゝる、何百部売れぬハ板代がかへ

らぬと申事、前序を胸勘定して、その年の紙の相場迄よくよくこゝろ得ね八、板元のためにも身のためにもなり不申候。これを八しらず只作るものは素人作者也。とかくその時々の人気をはかり、雅俗の気入り候様に軍配いたし候事也。余人八しらず、野生八年来如此こころ得罷在候。(文政元年二月三十日牧之宛書簡〔注12〕)

ここには、素人作者ではなく、プロ作家としての意識がはっきりと描かれている。作者が「用心」すべきは、「第一に売れること」でなければならない、とする。この直接的表現は、書籍文化が商業レベルで論じられているに他ならず、ある種の強い世俗臭を禁じえないが、少なくとも馬琴においては真実の吐露であった。その「用心」を忠実に実行しようとするればこそ、異国の文学の中に「新趣向」を見出そうとの意識が強く働くことになったのである。

「文政11年5月21日付殿村篠斎宛馬琴書簡」には、彫ったはいいが、利益はなくて、板を手元に置くことができたことが儲けである。今後はこれを誰かに売って利益としたいが、それとて400部売れなければ元金は取り返せない、と記される(「自分にてほり立ても、うることならず、人にうりてもらひ候故、利分八人に得られ、やうやう板ヲ自分の物二いたし候が所得二御座候。それでもほりたがり候もの多し、畢竟板ヲ株二せんと思ふ見込にて、うり出候節、損さへせねばよい、と申了簡二御座候。しかれども、四百部売捌申さねば、急二元金かへり不申候。」)

また、『好迷傳』を翻案したと思われる『侠客傳』は4集まで出したが、5集からは停止する。「天保13年2月11日付殿村篠斎宛馬琴書簡」には、その間の事情を「小子、先年侠客伝の板元河茂と絶交せしにあらねど、侠客伝4集二至りて愈多く売候間、潤筆は八犬伝同様たるべしと申出候を、河茂甚不承知二而、然からバ、五集八綴り賜るに不及。」(「馬琴書翰集」『天理図書館善本叢書』第53巻、1980)と記す。潤筆料の要求が、拒絶され出版停止になったことが窺える。売れること、それに伴う利益が作者にどれ位還元されるかが、驚くほど大きな、出版に到る要因であった。そこで、次々と新たな「売れる」作品を書くためにもタネ本の存在は不可欠であった。中国にそれを求めたのは、構想の借用ほど簡単な創作はなかったからである。

それ故、売れるネタを中国文学の中からいかにして見つけたかが大きな仕事の一つでもあった。

中国才子佳人小説は、先述したように 才子と佳人の物語、運命的な男女が試練に遭遇し、それを克服して結ばれる、極端な性描写に走らない、というフォーマットをもつ作品群である。この作品に、馬琴が創作の「趣向」を求めようとしたのは、まさにフォーマットの類似という点も指摘できよう。およそ、中国の文学は、とくに韻文において、外的フォーマットがあつてその中に文字を如何に埋め込んでいくかというのが、創作そのものであった。才子佳人小説においても、多くは、ストーリー構成のフォーマットの中で話を展開していけばよかった。

同様に、江戸の読本も合本もフォーマットの中で、テキストは創作されたと見てよい。水野稔は、草双紙におけるフォーマットを「男女の見そめと契り、強悪人の横恋慕からの殺害、宝物の紛失、悪人の惨虐の累加、孝子の受難、密通と悪計、怨念と執念の怪異、亡霊の告げと冥助、敵の遊蕩、討手の辛苦、仇討本望の成就、紛失の宝物出現、家中の陰謀の暴露、誅罰、肉親の不測の邂逅、婚姻と大団円〔注13〕であるといい、高木元は「江戸読本」も同様である〔注14〕と指摘する。フォーマットがあるが故に、新たなヒントさえあれば、新たな作品は割合容易に産出するのである。

才子佳人小説のフォーマットである「運命的な男女が試練に遭遇し、それを克服して結ばれる」ことと、江戸期日本における「男女の見そめと契り」、「強悪人の横恋慕からの殺害、宝物の紛失、悪人の惨虐の累加、孝子の受難、密通と悪計、怨念と執念の怪異、亡霊の告げと冥助、敵の遊蕩、討手の辛苦、仇討本望の成就、紛失の宝物出現、家中の陰謀の暴露、誅罰」、「肉親の不測の邂逅、婚姻と大団円」というフォーマットは、大筋において同じである。馬琴は、才子佳人小説がいわばフォーマットを共有した「同工異曲の類型的作品〔注15〕群であることを熟知した上で、「新趣向」を求め続けたであろう。

また、才子佳人小説の陸続たる出版および江戸期日本における合本・読本などへの翻案は、ともに書肆の発展のなかで産出した必然の現象であったと見ることができよう。前述した馬琴がぶれの木村黙翁の言を以ってすれば、「我邦近年述作せし、中本物、人情本といふは、艶郎妓婦の徒の痴情状態を書し物にて、原は新内、祭文などいふ鄙俚の唱曲より、俳意しだせし物ながら、是も唐山に類なき事にあらず、玉嬌梨、二度梅、療妬伝などいふ纒か四五冊の幅箱本の、才子佳人の奇遇を書たる本いくらもありて、是は唐山の書肆の徒が、唯商売のために杜撰に著述せし冗籍ゆゑ、文人佳客は、是を仕込本と称へて、賤しみ賞せぬもの、我邦の中本と括棹せしものといふべし。〔注16〕というように、同時代の同じ現象として、中本(人情本)合本、読本と才子佳人小説の類をとらえていたのである。ここで記された「唐山の書肆の徒が、唯商売のために杜撰に著述せし冗籍」とする言説は、才子佳人小説が営利を主目的とした書肆の活動の産物に他ならないことを喝破したものであり、「仕込本(一般大衆に売ることを前提にあらかじめ多くの部数用意された本)」であるとの認識は、木村翁や馬琴等の身の周りに才子佳人小説そのものが複数部存在していて、割合と手に入りやすかったことも背景にある。それは当時の中国書の輸入量から見れば極めて恵まれた環境を意味している。以上のような認識と環境のなかで、馬琴は、新たな創作の「趣向」を求めするために才子佳人小説を受容していったといえる。

4. まとめ

以上、中国才子佳人小説の受容が、馬琴においては、新たな創作のための「新趣向」を求める動きの中で行われたことを証明した。しかし、「新趣向」の実践においては、常に一つの「用心」を働かせなければならなかったことも見て取れた。ここでいう「用心」とは、書肆の確立にともなう営利の意識であった。それ故、幾つもの才子佳人小説を目にし、創作のヒントを得た馬琴も、営利追求の前には、出版断念を余儀なくされる状況が生じることも例挙げた。

前述『風俗金魚伝』の出版と成功の理由は、原作そのものが、日本の小説には例を見ないスケールの主人公の苦難と克服という「新趣向」、人物の内面描写の相対的深化などの描写面での完成度の高さを備えていたからに他なるまい。「用心」に十分応えうるものであればこそ、翻案に至ったのである

このような中国小説の翻案にいたる背景は、馬琴においてのみ顕著であったのではなからう。江戸期の日本は、中国文化の受容と展開を、書肆の営利出版、職業作家の成立、受容者の嗜好など書籍を取り巻く環境の中で取捨選択してきたと概括できまいか。この点、同じ才子佳人小説の受容において、写本の形で主として上流階級の女性に読まれた、或いはあたかも自国の文学の如くハンゲル本として読まれていった『玉嬌梨』など朝鮮半島の状況とは多に異なる(注17)。例えば『金雲翹傳』の王翠翹の苦難を自国の民の悲哀に重ね、様々のジャンルにまで深く浸透させていった越南における受容のあり方とも相違するが、この点は、別稿で論じる。

小論は、平成13・14年度 文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの出版文化の研究領域」「中国における才子佳人小説の出版と朝鮮・越南・日本への影響（代表 磯部祐子）」の研究成果の一部である。

注

- (1) 石昌渝『中国小説源流論』（生活・読書・新知三聯書店刊、1994）に見える。
- (2) 岡崎由美「神童の恋 明末清初才子佳人小説雑考」（『中国文学研究』、1989）に見える。
- (3) 『風俗金魚傳』初編四巻（国画画 錦耕堂刊 文政12年）がある。そのテキストとしては、博文館編輯局『風俗金魚傳』（明治33年刊）等がある。
- (4) 『通俗金翹傳』は、『近世白話小説翻訳集』第2巻（1984年、汲古書院刊）があり、現在最も容易に目にすることができる。長澤規矩也蔵本（第1冊第2冊）及び中村幸彦蔵本（第3冊～第7冊）の影印本である。
- (5) 馬琴の近刊予告に関する総括的研究として、高木元「江戸読本の新刊予告と〈作者〉 テキストフォーマット論覚書」（『馬琴』所収、日本文学研究論文集成22、若草書房刊、2000）がある。
- (6) 木村三四吾編校『京大本馬琴書簡集 篠斎宛』（八木書店、1983）所収。以下、本論文引用の馬琴書簡は明示がない場合すべてこの書簡集に依る。
- (7) 筆者はかつて、畠中観齋『唐土奇譚』の記載をもとに、中国戯曲受容の限界の背景として、享受者の問題について触れた。磯部祐子「江戸時代における中国戯曲の受容と展開」（『東北大学日本文化研究所研究報告』第21集 1985）参照。
- (8) 「木村黙翁老書櫃集（木村三四吾著作集 『滝沢馬琴 - 人と書簡』所収、八木書店、1998）に「平山冷燕之小女之文才、翰林学士を压倒シ、好速伝之佳人才子、義侠二而色情を放したる趣向、是等又新奇二御座候。」と見えることなどから、才子佳人小説を「新奇性」という点で評価していたと見てよい。しかし、翻案に至らなかった背景として、高木元が、江戸・文化初期の流行を「獵奇趣味と残虐さ」と括ることができる可能性を提示している点に注目したい。（高木元『江戸読本の研究 19世紀小説様式攷』p. 294（ベリカン社刊、1995）参照。
- (9) 佐藤悟「合巻の構造 『画傀儡二面鏡』の「世界」と「趣向」（水野稔編『近世文学論叢』所収、明治書院、1992）に、柳亭種彦の「趣向」についての考察がある。
- (10) 木村黙翁「国字小説通」（『続燕石十種』第一巻所収、中央公論社刊、1980）に見える。
- (11) 馬琴の潤筆料の研究として、麻生磯次『滝沢馬琴』（三省堂、1943）、服部仁「天保初年に於ける馬琴の年収」（『学習院大学国語国文学会誌』18号所収、1973）、「馬琴の潤筆料と板元」（日本文学研究論文集成22『馬琴』所収、若草書房、2000）などがある。
- (12) 『鈴木牧之全集（下巻）』（中央公論社刊、1983）に見える。
- (13) 水野稔「京伝合巻の研究序説」（『江戸小説論叢』、中央公論社、1974）に見える。
- (14) 高木元「江戸読本の新刊予告と〈作者〉 - テキストフォーマット論覚書」（『馬琴』所収、日本文学研究論文集成22、若草書房、2000）
- (15) 注(2)に同じ。
- (16) 注(10)に同じ。
- (17) 完山李氏『中国小説絵模本』（江原大学出版部 1993）、鄭炳説「朝鮮後期の東アジア語文交流と断面 東京大学所蔵翻訳本『玉嬌梨』を中心として」（韓国語『韓国文化』27所収、2001）参照。

On the reception of the Genius and Beauty Romances : The Case of Bakin

This paper will describe the influence of the Genius and Beauty Romances on Bakin. Bakin chose to adopt the Genius and Beauty Romance in order to explore new ideas for his own writing. However, while composing his writings he was constantly making painstaking efforts to insure that his final writings would be as marketable as possible. After reading many Genius and Beauty Romances, he absorbed many elements of the original writing style. In spite of this, he was often unable to produce his own original works using this style of writing as a base.

Bakin had written a widely acclaimed adaptation of "Fuzoku Kingyou Den." We can conclude that this novel's success was to some extent a direct result of the literary excellence of the original Chinese version. However, until the release of this book, Japanese readers had never been exposed to the innovative idea that a leading character can overcome so much adversity and prevail. The excellent description of the inner workings of the main character's mind was also very original. Because of all of this, he became determined to adapt it.

During the Edo period, many Japanese authors also chose to use Chinese culture with commercial purposes in mind. Also, many surrounding countries absorbed similar Chinese romance scenes but they did not focus so much upon commercial application.

Key Word: Bakin ,the Genius and Beauty Romances, adaptation, reception, new ideas, commercial application